

# 或る思春期の少年にとっての価値について

—サルトル『存在と無』における「対自」の在り方を手がかりとして—

学校教育開発学コース 遠藤 野ゆり

The Study about the Value for a Certain Adolescent Boy  
Based on the Concept of “For-Itself” in Sartre’s “Being and Nothingness”

Noyuri Endo

This case study aims to reconsider what kind of effects the “value” (valeur) has on adolescent children, based on Sartre’s elucidation of the concept of “For-Itself” (pour-soi).

A sixteen-year-old-boy lives with a care worker and his wife in a small-scale children’s welfare institution for the rehabilitation of juvenile delinquents. Sometimes, he states contradictory values, at other times he tries to realize his value just as the value indicates. According to Sartre, our consciousnesses as For-Itself are, typically in the adolescence, being what it is not and not being what it is; and human beings project themselves for the value to recover the lack which we must be. However this boy tries to become no-lack-being in the present in order to avoid feeling “anguish” (angoisse) which we feel when we notice that it is only we ourselves who exist the value. Through this study, it is turned out that the care worker supports such a being of his in order to be toward For-Itself by permitting him to be temporarily as “In-Itself” (en-soi).

## 目 次

はじめに

- I 矛盾する価値
- II 即自的な価値の実現
- III 対自で在り続けることの困難さ
- IV 即自存在となることの許容

おわりに

はじめに

近年、子どもの規範意識の低下等が指摘される中で、子どもに適切な価値観を育むことの重要性が議論の的となっている。例えば精神科医の町沢は、今の子どもが多く、「対人関係の能力」も「感情のコントロールの能力」も「共感性も低い」のは<sup>1)</sup>、「親が本当の意味の倫理感を持っていない」<sup>2)</sup>からである、と指摘する。したがって、「『これは社会的に正しい、正しくない』といった判断基準が染みついて」いる父親が、「社会のなかで自分の居場所を見つけて自立できるように」子どもを導いていくことが必要である<sup>3)</sup>、とする。

しかし、道徳的価値を理解させ、その価値に応じた振舞いを求めることは、子どもたちにとって本当に良いことなのであろうか。というのも、価値は、単に理念的に掲げられるものではなく、日々の行動の中で、また行動によって実現されるものであり、その限りにおいて、むしろ意識されないはずだからである。例えば秘密を洩らしてはならないという価値は、実際にその秘密を洩らさないことによって実現されると同時に、その秘密は洩らされるべきではないものとして当人に存在するようになる。つまり、この価値は、秘密を洩らしてはならないと意識することによって実現されるのではない。

そもそも、いわゆる自意識の高まりの中で、自己の在りようを重大な関心事とせずにはいられなくなる思春期の子どもたちの多くは、自分が抱いている価値についても敏感にならざるをえない。この時期の子どもたちの多くは、学校等で、友人たちと同じ価値を共有するために、その価値を実現することに非常に強いこだわりを見せる等、或る価値を価値あるものとするために何らかの振舞いをするによって、友人関係を

支えようとする。それどころか、以下で事例に即して考察するように、或る価値を抱くことが、いわゆる自尊心をもつことと不可分になり、当人にとって重要な問題となってくることさえある。

したがって、子どもの価値観やその揺れ動きを理解するためには、子どもが立てる価値の内容だけではなく、価値の内容やその変化が子どもの自意識にいかなる作用を蒙らせるのか、ということをも考察しなければならない。また、子どもが自分の価値をいかにして支えているのかを明らかにし、或る価値を抱いている意識はどのような在りようをしているのかを考察しなければならない。そのためには、価値とはそもそも私たちの意識の在り方といかに関わっているのか、という問いにまで根源的に遡る必要がある。

サルトルは、『存在と無』において、通常私たちが自意識と呼んでいる意識も含めた意識の本来的な在り方を、対自として捉え直し、価値を立てている意識について考察している。そこで、本稿では、サルトルにおける価値の考察に依拠しつつ、或る自立援助ホーム(以下「ホーム」と略)で養育者の林さん(50歳代後半、仮名、以下同様)とハル子さん夫妻と共に暮らす晃君(16歳)が、自分の掲げている価値をどのように支え実現しようとするのかを、また、養育者との関わりの中でその揺れ動きをどのように体験しているのかを、彼の意識の在り方に定位しながら、事例に即して考察したい。

## I 矛盾する価値

晃君は、以下の記録の約一週間前に、ホームで生活し始めた。礼儀正しく明るく振舞う晃君は、普段、非常に生真面目な様子を見せていたが、他方で、林さんによればかつてはいわゆる非行少年であったという晃君は、突然他の子どもたちや林さんを鋭く睨みつけることもあり、落ち着きのない、硬い印象を筆者は抱いた。

「A君〔=以前ホームで暮らしていた男性〕は、そりゃあ、すごいワルだったよ」と林さんは言う。(略)晃君が唐突に、「俺、〔A君の名前は〕知らないっすねえ」と言った。林さんは、「そりゃあ知らないよ、こっこの辺の子じゃないから」と言う。晃君は、「いや、でもそんなすごい奴だったら、絶対名前とか聞こえてくるんすよ。でもそういうの聞いたことがない」と不満そうに言う。A君のことを林さんが誉めるかのよう

に語るのが、少し悔しいように見えた。「そりゃあ、あなたとは年齢が違うから。(略)でもあの頃は、この辺でだって、その子の名前を出したら、ヤクザが、ええって身を引いたからね」と林さんはなおも言った。晃君は、「そうか」と言うけれど、まだどこか悔しそうに、「じゃあ、兄ちゃんぐらいの年か。兄ちゃんに聞けばわかるか」と頷く。(略)

林さんが「B子ちゃんの話なんて誰も聞かないよ」と言ってB子さんをからかうと、晃君が急に、「でもあれっすよ、俺はちゃんと聞いてますよ。(略)俺だけっすよ」と誇らしそうに言った。林さんにはやっと笑うと、「聞かなくていいこともあるんだよ」と言う。晃君は、その言葉を聞いて、どこか表情がまじめになる。そして、「でも俺、ばあちゃんに、自分がされたら嫌なことはやるなって言われてきたから」と、それまでのふざけたような口調の中にも、半ば真剣さをにじませて言った。林さんも、すっとまじめな表情になり、「いや、それは違うね」と言った。晃君は、むっとしたように、「なんでですか」と言うが、林さんの表情が真剣なのに気づいてはっとしたのか、そのまま黙る。「あなたが言われてきたことは、もちろん正しいこともあるけど、正しくないこともあるんだよ」。林さんは、重い口調で言う。晃君は、全神経を集中させているかのように鋭い視線で林さんの顔を見た。「あなたはおばあちゃんに育てられて、そういう古風な、いい考え方も沢山知ってるよね。でもさ、自分がされて嫌なことなんて、沢山されてきたでしょう、おばあちゃんだって厳しかっただろうし、それに何よりも、親から散々嫌なこともされたでしょう。あなた、孤独だったでしょう、辛かったでしょう。自分の親から、あなたはいらなくなって拒否されて」。林さんは、晃君の顔をじっと見ながら言った。晃君の口は開いたままで、林さんの言葉に戸惑ったように、視線は一点に定まらない。「あなた、すごいよ、頭もいい。仕事もできる。僕の言ってること、全部わかってるもんね。(略)」。林さんは、じっと晃君の顔を見つめ、一言一言静かに言った。晃君の表情は次第にこぼぼってくる。歯を噛み締めるように、肩に力が入る。林さんは、ゆっくり言った。「あなたはちっとも悪くないんだよ。覚えておいて。あなたは全然、全く悪くない」。晃君が、言葉を失い、呆然とした表情になる。晃君は、じっと考え込んでいたが、やがてふっと顔をあげて林さんを見ると、「だってそれは、俺が悪かったから」と言った。その言葉の途中から、林さんは大きな、しかし優しいどっしりとした声で言った。「いいえ、あなたは全然悪くない」。

晃君は、林さんの言葉に黙りこむ。晃君は、戸惑ったような表情だ。林さんは、しばらく間をとって、もう一度言った。「あなたは全然悪くない」。その言葉を聞いたとたん、晃君が、しゃくりをあげて泣き出した。静かに下を向いて、肩を震わせ、涙を静かに流す。時折、嗚咽が洩れた。

この場面における晃君の在り方に関しては、サルトルの記述を待たなくても、以下のことが考えられる。

まず何よりも、晃君は、二つの異なる価値を抱えていることが窺える。この場面の前半において、林さんが他の人を「すごいワル」と表現すると、晃君は、悔しそうに反論する。彼のこの反論からは、晃君自身も、「すごい奴」の名前を必ず知っているような、相当程度のワルであったと主張したいだけでなく、「すごいワル」、「すごい奴」であることを価値ある在り方とし、それを林さんに誇示したいという彼の思いが伝わってくる。他方、後半において、かつて祖母から聞かされてきた言葉を真剣に語ることから、晃君は、「自分がされて嫌なことは他の人にもしてはならない」という考えを、価値あるものとしていることがわかる。「すごいワル」であることと、「自分がされて嫌なことは他の人にもしてはならない」というこれら二つの価値は、矛盾する内容を含んでいる。にもかかわらず、晃君は、躊躇することなくこうした価値に関わる事柄について語っており、その矛盾を自覚していないように見受けられる。このことから、晃君が、いわゆるワルの社会における価値と道徳的に正しい価値とを、その内実をほとんど吟味することがないままに用いていることが窺える。晃君の口調が真剣であるにもかかわらず、彼はこの価値を実現することの重みを了解していないだけでなく、両者を同時に実現することが本来不可能であることも理解していないように、傍で聞いていた筆者には感じられた。

「自分がされて嫌なことは他の人にもしてはならない」という価値は、非常に抽象的な内容しか備えていない。この価値を本当に実現するためには、いかなる振舞いをされたら自分が嫌なのかをまず具体的に理解しておき、そうした行為を他者に対してなす可能性を立てながらそれを自ら否定するという仕方、自分の行為を実現しなければならない。また、こうした可能性を深く吟味すれば、この可能性は自分の可能性ではないために、他者にとってもやはり嫌な行為であるとは限らないことにも、本来ならば気づかされるはずである。この場面でも、晃君の想定に反して、他人の

「話をちゃんと聞かない」という行為は、必ずしも否定されるべきではないことが林さんから明示されている。

それどころかこの価値は、ことさら言語的に表明し吟味する必要のない、通俗的で平凡な道徳的価値ではない。通常私たちは、このような価値を否定はしないが、何よりも遵守すべき価値として自ら標榜する必要を感じない。しかし、誇らしげな晃君の口調からは、晃君が、この価値を価値あるものとみなしているだけではなく、この価値を語っている自分自身を誇らしく感じていることも窺える。「自分がされて嫌なことは他の人にもしてはならない」という立派な価値を自分の価値として掲げていること自体が、晃君にとって、自分を価値ある存在たらしめてくれるのであり、晃君はこのことによって、いわゆる自尊心を抱くことができる。価値の表明は、彼自身を価値ある存在として支えてくれるのである。他方、もしもこうした立派な価値を吟味してしまえば、自分自身が実は価値のない人間なのではないか、と感じるかもしれない不安に陥る危険が生じる。それゆえ晃君は、価値を吟味しないのではなく、むしろ、吟味することができない、と考えられる。

また、晃君のこの言葉は、彼自身がこの価値の体現者である、という主張ともなっている。しかし、例えば自らを誠実と評する時に典型的となるように、私たちは、自らについて良い評価を述べることに、何らかの気恥ずかしさや謙遜の気持ちを抱く。晃君のように、自分は道徳的価値を体現していると自ら憚りなく語ることは、思春期にある、あるいは思春期を過ぎた人間にとっては、むしろ難しいであろう。

そこで、価値をことさら表明することに何らかの困難さを感じざるをえない私たちの意識自身への現前を、対自の在り方として解明しているサルトルに依拠しながら、価値に関する晃君の意識の在り方を、さらなる事例とともに以下で考察していくことにする。

サルトルは、自意識という言葉で私たちが通常捉えている意識の在り方を、まず、以下のように考察している(cf. p.17以下)<sup>4)</sup>。私たちの意識は、何らかの対象を志向的な経験対象としている時に、すなわち、何かを定立的に(positionnelle)捉えている時に、常に、この定立的意識の主体は他ならぬ自分自身であることも、非定立的に(non-positionnelle)捉えている。例えば自分を誠実な人柄と評する時には、自己を反省的に定立しつつも、こうした評価を与えているのは他ならぬ自分自身であることを、私たちは非定立的に了解している。それゆえサルトルは、こうした意識の在り方

を、半透明性(translucidité)と呼んでいる。意識のこの半透明性ゆえに、自己を誠実な者と評したとたん、あるがままであるという意味では自分はもはや誠実ではない、という意識に私たちは陥る。と同時に、こうした意識に陥っている以上、自分は誠実であると意識している意識は、「自己への現前(présence à soi)」(p.115)によって、誠実ではない意識となってしまう。サルトルは、自己に対して現前するというこうした在り方が意識の本来的な在り方であることを明示するために、意識の存在を「対自(pour-soi)」と呼んでいる。すなわち、対自としての人の意識は、「それが在るところのものでなく、それが在らぬところのものである」という一見すると逆説的な表現で定式化されるしかない仕方で存在することを明らかにしている。

サルトルが述べるこうした意識の在り方は、自己の在り方を大きな問題とせざるをえない思春期の子どもたちにおいて、典型的となる。それどころか、思春期とは、例えば悲しんでいる時であっても、悲しんでいる自分を捉えることによって、悲しんでいる自分そのものではなくてしまうことに、あるいは、自分の悲しみがそれで在るところの本当の悲しみではない(cf. p.101)、ということに気づかされるように、或る在り方そのもので在ることに困難さを覚える時期のことである、とさえいえる。しかし、上述の場面において、自らが価値を体現していると表明して憚らない晃君は、他者の前で自身をこう評することによって本来対自がそうなるころの、価値の指し示す内実そのものではない在り方をしていないことが窺える。というのも、対自的な在り方となることは、価値の体現者ではあらぬ自己と向き合うことであり、意識の半透明性ゆえに、価値を実現できない自己を自ら感じざるをえなくなることだからである。それゆえ、晃君のこうした在り方からは、彼が、価値の内実そのもので在ることによって、実は自分が価値のない存在であるかもしれない、といった不安を感じる可能性から逃れようとしている、ということが窺える。

## II 即自的な価値の実現

では、晃君が価値を本当に実現しようとする時には、晃君はどのような意識の在り方となるのであろうか。このことを明らかにするために、Iの事例の三週間後、会社でのトラブルをきっかけに出勤できなかった日の晃君の意識の在り方を考察したい。晃君は、暗い表情で、無言のうちに食卓につき、料理を全く食べようと

しなかった。

林さんが突然、「晃君、食べなくたって何も変わらないんだから。それは昨日もわかったでしょう。だから、食べなさい。食べて、それから話そう」、と大きな声で言う。しかし晃君は、林さんの言葉に強く唇を噛んだだけで、身動きしなかった。ハル子さんも、「うん、食べなさい。できたてを食べた方が美味しいのよ。せっかく作ったんだから」、と言う。「そう、食べなさい」。林さんが再度促すが、晃君はじっと動かない。(略)林さんが、もう一度、「晃君、食べなさい」、と強い口調で言った。ハル子さんも、「うん、食べなさいな。あつたかいうちに食べないと、せっかくおいしいのが冷めちゃうわよ」、と促すが、晃君は、相変わらず黙り込んでじっとしている。(略)林さんは、黙り込んで硬くなっている晃君に向かって、「食べられないんだったら、ここにいっても辛いでしょう。もう休んでいいから。それでまた明日考えよう」、と言った。晃君は、体を硬直させたまま動かない。「もう休んでいいから。辛いよここにいっても」、と林さんはもう一度言う。晃君は、その言葉をじっと聞いているようだったが、しばらくしてすくっと立ち上がると、ドアの前で「おやすみなさい」、と礼儀正しく頭を下げて出て行った。林さんは、こうした事態に至った会社でのトラブルが、晃君の非によるものではないことをその場にいた皆に語ってくれた。「まじめですね」、とC君が言うと、「うん、そうだね。(略)そこは16歳だよ、仕方ない」、と林さんは苦笑混じりに言う。「(略)あいつ、自分が働いてこなかった日は、一切食わないって言って、食べないの。昨日もここでじっとしてて、食べなかったんだよ」、と林さんは言った。

Iの事例とは異なり、この場面での晃君は、「働かざる者食うべからず」という価値を実現するためにはどういった行為をしなければならぬかを、具体化せざるをえない。そもそも、人は、例えば料理を前にして、それを食べるとか、食べないとか、少しだけ食べる、といったように、様々な可能性を生きている。しかし日常的には、自らが大きな齟齬や困難なく生きている世界が備えている「要求構造」(p.74)に従い、私たちは自分の可能性を殊更定立することなく、行為できる。自分の可能性を問題としなければならぬのは、非反省的に行為を実現することのできなくなる事態においてである。大きな齟齬や困難なく非反省的に生きている時にはご飯を四杯も五杯も食べる、食べ盛

りの晃君にとって、丸二日間食事を断つことは、限界に近かったはずである。したがって晃君は、断食という辛い行為を選択するためには、通常ならば、他の選択肢もあるのではないかといった、様々な迷いを感じるはずであろう。しかしながら、食卓に座り料理を目の前にしながらも、硬くこわばっている晃君のこの時の様子からは、彼が食欲と格闘していたようには感じられない。対自的な仕方ではなく、自分の立てる価値をそのままに実現している晃君は、この場で、例えば控えめに食事をするといった「他の諸可能を無化するためにそれらを〔一旦〕立ててみる」(p.68,〔 〕内引用者)ことさえ、つまり、食事をする可能性を一度考慮した上であえてこの可能性を選ばない者となる、といった選択さえ必要としないのである。

もしも晃君が、食事をとるべきではないのかどうかを考えれば、この時彼が固執している価値がいかなることを目指しているかが彼自身にも明らかになったであろう。すなわち、この価値は、怠惰を戒めるのであって、何らかの不可抗力によって働くことのできなかつた者を罰するのではないことに気づかされたであろう。しかし、たとえ晃君がこのことに気づかされたとしても、どういった行為が怠惰であり、どういった結果が不可抗力によるものであるかの判断は、この価値を実現しようとする者に委ねられている。通常私たちは、要求構造を備えた「諸価値をもった一つの世界の中に拘束されている」(p.77)ため、いわゆる道徳的価値基準をもとに様々な判断を下しうる。他方、晃君は、食事をするようにという林さんやハル子さんからの要求に従おうとしない間は、自分の価値観を試され続けることになる。というのも、実は、「諸価値が存在するのは、〔私の〕存在」(p.76,〔 〕内引用者)によってでしかない限り、晃君は、自分の選択のあらゆる価値基準を自分で支えるしかないからである。しかしながら、このことを自覚すれば、人は不安に陥ってしまう。晃君は、不安に陥らないために、非反省的に生活している時には不安に陥ることから彼を守ってくれるはずの道徳的な価値までも、非常に厳しい価値基準としなければならなくなる。彼は、欠勤という自分の行為のすべてを、食事するに値しないものとみなし、自分でこの行為を厳しく糾弾することに迷いを感じることをさへなくしてしまうのである。

晃君は、働かざる者食うべからず、という価値の示す在り方そのもので在ろうとするあまり、それ以外の在り方になることができない。対自の本来の在り方とは異なり、この時の彼は、「それが在るべきであろう

ところのものであり、それが在らぬべきであろうところのものであらぬ」という在り方を、つまり、自分の掲げる価値があるところのものそのもので在ろうとするのである。こうした在り方は、サルトルによって「即自(en-soi)」と呼ばれている事物の在り方であり、対自である人の意識とは異なる在り方である。しかし、この時の晃君は、以下で述べるように、事物の在り方をサルトルなりの仕方で表している、こうした即自の在り方をしていた、と考えられる。

本来、対自は、「それが在るところのものであらぬ」という在り方をしている。例えば、苦悩している時、私たちは、「悲劇のお面の上に読みとる」ような、「欠けるところのないほどの緻密な客観的なものとして私たちに提示される」苦悩と同様の仕方で、在るところのものそのものの苦悩ではありえない(p.135)。というのも、私の意識が苦悩している限りにおいてしか苦悩は存在しないのであるが、私の「意識の半透明性は、私の苦悩からあらゆる深さを奪ってしまう」からである(p.135)。私たちの苦悩は、「完全でしかも不在な、こうした苦悩の現前において、十分に苦悩であらぬこと(についての)〔=非定立的な〕意識としてしか、苦悩ではありえない」(p.136,〔 〕内引用者)。このように、人の在り方は、それが在るところの完全な在り方に対して、常に「欠如分」(p.129)を含む。しかし、こうした欠如状態は決して否定されるべきものではない。それどころか、私たちは、自分の欠如分を回復すべく未来へと向かって自己を投げ出すのであり、この欠如分こそ、対自がこれから生きうる己の可能性なのである。人は、「もしも自分が在るところのものであるならばそう在るであろうところの、こうした特殊な存在へと向かって自己を超出する」(p.132)ことによって、自分の可能性を生きる。或る価値を実現しようとする時にも、本来ならば対自は、今の自分はその価値の表す在り方そのものではあらぬがゆえに、未来においてその欠如を回復する試みによって、当の価値の実現を目指すのである。とはいえ、自己を投げ出した対自は、その投企先の未来においてもやはり対自であるがゆえに、さらなる欠如を含んだ存在でしかありえない。したがって、対自は、絶えず欠如分を回復し自己を超越する仕方で、自己を未来へ投げ出し続けなければならない。

それゆえ対自は、「働かざる者食うべからず」という価値を実現している時には、例えば、「こうした戒めを破らないほど真面目である」、といった在り方をより遠い価値としていることになる。しかしながら、「働かざる者食うべからず」という価値そのものを厳格

に実現しようとしていることから、晃君が、戒めを破らないという在り方を、目前の価値の実現によってさらに目指されるべきより遠い価値としているというよりも、現在において欠如を全く含まないという意味で即自的に完全に実現しようとしていることが窺える。そうであるからこそ、晃君は、食事をとらないという選択をするかどうかを迷うこともできなくなるのであり、自分の振舞いを非常に厳しく律せざるをえなくなるのであろう。したがって、晃君は、現在の欠如分を回復すべく未来へと向かって自己を投げ出し、現在の自分を乗り越えていくことにおいてではなく、すなわち、自らの不安定さを自覚しているがゆえに、むしろ柔らかな仕方で価値を実現しようとする対自の在り方においてではなく、あたかも事物がそうで在るところの即自的な仕方で、それゆえ頑ななまでに、現在の自分の在るところにおいて、その価値が在るところのものであろうとしている、といえる。

サルトルによれば、対自が目標へと向かって絶えずそのつどの意識を超越していく時の、行きつく目標としての「自己(soi)」こそが、本当の「価値である」(p.136)。こうした「価値は、或る存在がその存在を超出しその方へと向かっていく当のものを、存在意味としてもっている」(p.137)。晃君が、或る目標へと向かって自己を投げ出す、そのつどの価値のさらに背後にも、よりいっそう深遠な価値が控えているはずである。こうしたあらゆる価値のかなたに控え、あらゆる行為を方向づけているもの、それこそをサルトルは、「根源的出現における価値」(p.138)、と呼ぶ。

Iの事例において、「すごいワル」であることを価値ある在り方と捉えながら、ほぼ同時に、「自分がされて嫌なことは他人にもしてはならない」という道徳的価値を立てたり、IIの事例において「戒めを破らないほど真面目である」ことを価値ある在り方と捉えたりするなど、晃君の掲げる諸価値は矛盾しているように思われる。しかしながら、こうした諸価値を明示的に掲げながら、晃君は、非常に強く鍛錬され律せられた何らかの「すごさ」を理想としている、と考えられる。晃君は、こうした「すごい」在り方となるべく、自分を非常に厳しく戒めるのではないだろうか。もしもそうであるならば、私たちから見れば矛盾しているように思われる、晃君によって固執されている諸価値は、晃君にとっては、いずれも「すごい」人間で在ることであり、矛盾することなく掲げうる価値であることになる。晃君は、こうした価値を掲げ、あたかもこの価値が彼にとっての根源的な価値であるかのように、自分の在

るべき姿を明確に捉えてしまっているのではないだろうか。

しかしながら、サルトルによれば、最も根源的な価値は、「私の諸可能を私に明らかにしてくれる行為によって予想される、遙か遠くの意味作用でしかない」(p.75)のであり、「価値は、あらゆる超出の意味(sens[=方向])として、かなた(au-delà)として、存在する」(p.137、〔 〕内引用者)しかない。つまり、私たちは、未来へと向かって可能性を実現しながら、自分が何らかの行為を実現することによって到達すべき価値と比して、未だ欠いている部分を回復すべく自己を超出し続けるが、そうすることによって根源的に目指されている価値は、私たちには決して捉えられない。晃君にも、彼自身の行為を方向づけてくれる根源的な価値を捉えることは、本来不可能なはずである。にもかかわらず、晃君は、自分がそうなるべき理想的な価値と、かなたに存在するしかない価値目標としての自己とを、彼自身によって捉えられるようなものへと凝固せしめ、即自的に捉えようとする。

しかしここで見過ごされてならないことは、晃君のこうした在り方は、彼自身によって選ばれたのではなく、彼はそのようにしか価値を実現できないのではないか、ということである。対自は、それが在るところのものであらず、という欠如を含んだ在り方をしており、この欠如があるからこそ、様々な可能性を自ら選ぶことができたのであった。しかし、そうであるからこそ人は、それが在るところのものとして即自的に凝固することがないのと同時に、本来、非常に不安定な在り方となってしまふ。晃君も、実際には「すごい」人間で在り続けることはできないはずであり、日々の生活においては、何らかの弱さを露呈することもあるはずである。対自在るとは、現在の自分が、理想として掲げる価値そのものではなく、その価値に対して欠如分を含む存在であることを、未来においてその欠如分を回復しようとする試みのうちに、許容する、ということでもある。しかし、この時の晃君には、自分が目指すところのものではあらずという在り方で自分が目指すところのもので在ろうとすることに甘んじることができないのではないだろうか。自分が目指すところのものであらずことを一度認めてしまえば、その自己を超越することができなくなるという不安から、自分が目指すところのものそのものですでにある、というように、即自的にこの価値の内容そのもので在ろうとするのではないだろうか。すなわち、彼は、未来において自己の欠如分を回復しようとするのではなく、

今現在の自分において、この欠如分があたかも存在しないかのごとく振舞わずにはいられないのではないだろうか。

### Ⅲ 対自で在り続けることの困難さ

Ⅱにおいて考察した晃君の在り方は、次に述べる、Ⅱの事例の四週間後の記録場面において、より典型的となる。

晃君は、疲れを示すように大きく伸びをすると、ハル子さんに、「お皿、お風呂に入ってから洗うんじゃないですか?」、と尋ねた。ハル子さんは、「だめよー」と優しい口調で言う。晃君は、「なんでですかー」と情けなさそうな声を出した。ハル子さんは、晃君の方にきちんと向き直ると、「あのね、昔は煙草も、ご馳走様でしたって言って、ここをみんな片付けて、それからお菓子を出したり、煙草を吸ったりしてたの。だから、この間、片付けなさいって言ったら晃君怒ったけど、でもそれは本当はちゃんと綺麗にしてからっていうのが本当なの」と噛んで含めるように言う。晃君は、じっと鋭い表情でハル子さんの話を聞いていたが、「でも、俺は、ずっと洗ってなくて、朝までこのままだったら怒られるのもわかるんですけど、ちょっと遅くなるぐらいはいいんじゃないかと思うんですけど」と反論した。そのとたんに、それまで黙っていた林さんが、「それは違う」と強い口調で言った。晃君は、林さんを見た。「煙草っていうのは、ちゃんと食事を終えてから、皆で話す時にならないよっていうものなの。ちゃんと本当は片付けてから。まずは八時半になって、ちゃんと皆でご馳走様してから。そんな、朝まで食器を洗わない奴なんて、相手にしないでいいんだ」と林さんは、今度は静かな口調で言う。晃君は、じっと鋭い目つきで聞いている。そして、林さんの言葉を聞き終えると、「じゃあ、何時ならいいんですか?八時半になったらお皿洗っていいんですか?」、と静かに尋ねる。林さんは、「八時半、まあ大体そのぐらい。それはその日の話の様子とかによるからね」と答える。「いや、俺は、そういうの決まってないの嫌なんで、八時半になったらとかの方がいいんですけど」と晃君はきっぱり答えた。林さんは、「大体八時半でいいよ。それでご馳走様ってなるから」と答える。「そんなの、きちんと時間は決められないけど」と林さんが続けると、晃君は、納得しかねるように、「いや、そこはちゃんとしてたいんで」と反論した。「俺

だけでいいですから。俺の規則で、八時半より前は絶対に吸わないですから。それでちゃんと自分のお皿を洗って、それから煙草吸います」と晃君は断言する。林さんはじっと話を聞いていて、「あのね、規則は良くない。規則っていうのは、なるべく少ない方がいい。いやらしくなる」と諭すように言う。「そうやってると、規則ばかりになって窮屈になるでしょう。そういうのは良くない。大体の流れがあって、そこで思いやりでね。煙草吸わない人だっているから、思いやりで相手のこと気遣って、それで煙草を吸うとか、お皿を洗うとかするといいい」と林さんが言うと、晃君は、「だから、俺だけのルールにします」と答える。しかし林さんは首を振って、「自分だけのルールじゃなくて。ちゃんと皆の流れで、ご馳走様をしよう」と言った。晃君は、じっと考え込んでから、「じゃあ、俺はちゃんとお皿を洗ってからじゃないと煙草を吸いません」ときっぱりと言った。林さんは、晃君の口調に合わせるようにきっぱりと、「よし、そうしよう。それは皆で、前のように戻していこう。ちゃんとそこはやっていくようにしよう」と頷いた。晃君は、ようやく納得したように頷いた。

皿洗いを後回しにするのは、「本当」ではない在り方である、とハル子さんに言われた時に、晃君が、例えば今日は疲れていて甘えてしまったとか、ハル子さんに叱られてしまった、というように自分を捉えることができる。そうすることによって、晃君は、こうした「弱さ」を露呈した者そのもので在ることから逃れられる。すなわち、対自の在り方となれば、晃君には、「すごい」自分そのものではあらぬ自分の在り方を許容でき、より柔らかな仕方で自分自身に接することが可能になる。しかしながらこの時の晃君は、ハル子さんに指摘されると、「ちゃんと」していなかった自分を認めるのではなく、それまでより一層「ちゃんと」した在り方であろうとする。当初、入浴の後でもよいはず、と言っていた皿洗いに、正確な時刻を設定するべきである、と自ら主張を変更する。この短い対話において、「ちゃんと」という言葉を何度も繰り返し発するこの時の晃君には、「ちゃんと」では在らぬ、という仕方で「ちゃんと」することができないのである。

林さんが語るような、「大体そのぐらい」で、「その日の話の様子とかによる」しかなく、「きちんと時間は決められない」ような食事終了のタイミングの計り方

においては、いつ皿洗いをしてよいかを判断する人の価値判断力が問われる。「諸価値の存在を保ち続けるのはこの私である」がゆえに、人は、「ただ一人で、正当化されうることもなく、弁解の術もないままに」、例えば今は皿洗いをしてよいのかどうか等々といった、様々な要求構造や通俗的価値を備えた「世界の意味を決定する」(p.77)しかない。対自存在は、この時の晃君のように、非反省的な行為の次元からほんのわずかだけでも自己の在り方に向き合うやいなや、こうした曖昧な事態に対する判断を迫られる。しかしながら、自らの判断のみによって、その場の雰囲気や意味を読みとり行為しなければならぬならば、その判断を誤ってしまう可能性はより大きくなる。とりわけ、他者への思いやりや配慮に基づくことが要求される場面で判断を誤ることは、思いやりや配慮に欠ける、という深刻な問題を生み出しかねない。自分のためだけでかまわないからきちんとした規則がほしいという晃君の主張は、「ちゃんとしてたい」からこそ、判断を誤ることによって「ちゃんと」できなくなり、他者に対して思いやりをもつことができなくなってしまう事態を、確実に回避できるような在り方でいたい、という彼の思いを物語っている。また、だからこそ晃君は、「ちゃんと」することを自分の未来の可能性とするのではなく、今現に自分が在るところにおいて、この価値が指し示すところのものそのもので在ろうとせざるを得ない。実際、八時半という明確な基準があれば、彼は自動的に、時間の「継起」に従って(p.175)自分の行為を実現できるのであり、うっかり規則のことを忘れてしまう等のない限り、彼は「ちゃんと」してられる。林さんは晃君に、「規則っていうのは、なるべく少ない方がいい。……窮屈になるでしょう」、と語る。しかし、この時の晃君は、むしろ、窮屈になりたがっている。規則に縛られる窮屈な在り方ではあらぬ在り方になってしまうと、彼の振舞いには、「ちゃんと」しないに在る余地が残されてしまう。そのうえで彼が「ちゃんと」するためには、その余地の可能性を保ちつつ、その可能性を自ら否定することによって、「ちゃんと」在り続けなければならない。本来、「ちゃんと」していることを支えるのも、「ちゃんと」していることを価値あることとするのも、晃君ただ一人であり、そのことを自覚するやいなや、彼は不安に陥らざるを得なくなる。それゆえ、この不安から逃れるためには、彼は、他の在り方であることが許されない「窮屈」さを、むしろ積極的に望まざるを得なくなる。

晃君のこうした振舞いは、それが在らぬところのも

のであり、それが在るところのものであらぬ、という対自の在り方をすることが、晃君にとって非常に困難であることを物語っている。というのも、Iで考察したように、或る価値を掲げることによって、自己を価値ある者として支え、自尊心を保っている晃君にとって、対自の在り方となることは、自分自身を支えるものすら失う辛さを味わうことになるからである。例えば、対自的な意識が、「自分がされて嫌なことは他の人にもしない」という価値そのものでは在ることができない、という在り方において初めて、他者に対して親切に振舞おうとする在り方があることを了解できるのに対し、晃君は、この価値では在らぬことを、「自分が嫌なことを他の人に対してする」という文字通りの意味でしか理解できない、と考えられる。また、そうであるがゆえに、IIやIIIの事例における晃君は、具体的に価値を実現しようとする際に、その実現によって自己自身を支えるという意識の在り方となることさえできず、あたかも価値と自分自身とが一体化するかのごとく、その価値が指し示す内実そのものに、今現に在る在り方においてなろうとせざるを得ない。実際に日常的な生活を送っている時の晃君は、対自として生きているはずである。そうであるからこそ、晃君は、例えばお皿洗いを後回しにしたいと表明する、というような在り方となる。しかし、彼はそのように日常を送っているにもかかわらず、例えば、自分ではなく他の子どもを林さんが「すごい」と評したり、会社でのトラブルを体験したり、ハル子さんに「本当」ではないと指摘されたりするなど、彼の在り方を何らかの仕方で否定されるように感じることを契機に、自ら価値を主張しなければならなくなると、それが在るところのものであるべきである、という即自的な仕方でしか、価値を実現できなくなってしまうのではないだろうか。

#### IV 即自存在となることの許容

上述した三つの事例において典型的となる、自らの掲げる価値が問題となる際に対自となることの困難さは、価値の指し示すところのものそのものではないという自分の本来の姿に直面させられるそのつど、晃君に大きな危機をもたらすことになる。

Iの事例において、もしも林さんが晃君の価値の矛盾を指摘し、彼にそれぞれ価値の意味とその矛盾とを問い詰めたならば、晃君は、林さんの言葉をどうしても受け入れることができず、自分を支えるために、さらに頑なに反発せずにはいられなくなったであろう。



実際には、林さんは、晃君自身にとって辛かったはずの彼の境遇を指摘することによって、彼の言葉が矛盾していることを、それとなく明らかにしようとする。晃君に正しい価値を教えてくれた祖母をはじめとする、晃君の家族でさえ、この価値が示す通りには彼に接してくれなかったという事実を指摘することによって、晃君の掲げる価値が実は非常に脆いものでしかないことを、彼に示す。林さんのこの指摘は、林さんの価値に対してとっさに反価値を抱くことなく晃君が林さんの言葉を受け入れることを可能にただけではないことが、人目も憚らずに泣く晃君の様子から明らかになる。林さんによれば、晃君はこれまで、自分の親から「いらぬ」と拒絶され、祖母からは時に過剰なまで厳しくしつけられ、また、いわゆる非行少年として社会からも彼自身からも否定的に眺められてきた。したがって、「あなたは悪くない」という林さんの言葉を聞くことは、他者とのそれまでの多くの出会いとは異なり、自分を肯定的に捉えてくれる他者と出会うことに他ならなかったであろう。そうであるからこそ、晃君は、張り詰めて保持していたそれまでの在り方を大きく揺るがされ、泣くことになる。十六歳の少年にしては幼い印象を与えるこの時の晃君の泣き方は、晃君が、林さんの前で、幼い子どものような即自的な在り方となり、その在り方を許容されていることによって、或る種のカタルシスを体験していることを物語っている。

また、Ⅱの事例においては、会社に行くべきであると考えているにもかかわらず会社に行けなかったという危機的な状況にある晃君は、「働かざる者食うべからず」という価値が示す在り方そのもので在ろうとする在り方を、しばらくの間、林さんやハル子さんの前で保つことができる。確かに晃君にとって、食事を用意してくれているハル子さんに対する申し訳なさや、皆が楽しそうに対話している場で一人下を向き続ける辛さは、並々ならぬものがあっただろう。しかしながら、晃君は、この辛さを現に体験しているからこそ、自分に対して非常に厳しく接するという誠実な在り方となることができる。林さんやハル子さんからの再三の食事の勧めを頑なに拒むことによって、何らかの可能性へと向かうことなく、いわば凝固した現在において当の価値の指し示す内実そのものになるという、即自的な在り方で在り続けることができる。したがって、危機的な状況に陥っていた晃君は、この辛さによって贖われることが可能となるのである。

Ⅲの事例においては、林さんは、晃君の語るような「規則」は「いやらしくなる」と考えているにもかかわらず

ず、晃君の言葉を、最後には、「よし、そうしよう。それは皆で、前のように戻していこう。ちゃんとそこはやっていくようにしよう」、という言葉で受け止め、晃君の言葉が「ちゃんと」しており、晃君のみならず「皆で」この価値を実現していこう、と語る。ハル子さんに「本当」ではない在り方をしている、と指摘された晃君は、自ら「ちゃんと」していることを示さないわけにはいなくなっている。林さんは、そうした在り方が「窮屈」になることを指摘しつつも、晃君の頑なさを受け止めながら、晃君が「ちゃんと」していることを、林さん自身の言葉で肯うのである。

林さんのこうした働きかけは、晃君に、一時的に即自的な在り方となることを許してくれる。晃君を無理に対自的で在らしめようとし、それが在るところのものであらぬ、という在り方となることを受け入れさせようとするれば、晃君は、或る価値をそのまま自己の存在としていることによって保たれている、自分は価値ある存在である、という実感をも失ってしまう可能性がある。そして、この時期の晃君には、そうした存在感を失いつつ自分を乗り越えていくだけの準備が未だ十分ではない、と考えられる。ホームにおける晃君にとっては、即自的な在り方を許容され、実際に即自的な在り方を実現することによって、即自的ではない在り方へと、すなわち対自的な在り方へとなることが可能になるのではないだろうか。晃君がこうした在り方へと導かれるためにも、林さんが、そのつど晃君の在り方を肯うことが、この時の晃君には必要であったのではないだろうか。

おわりに

価値に関するサルトルの記述に基づく、上述した三つの事例についての考察は、求められるべき望ましい価値を子どもに理解させ、その価値を実現させることが孕んでいる危険を明らかにしてくれる。価値は、行動の規範や基準となるだけではなく、時に、その価値を抱くことそのものが、子どもの自意識を支えてくれる。とりわけ、非行や被虐待といった、自他共に自分をネガティブにしか捉えられない体験をしてきた子どもは、ネガティブな自己の存在を超越し乗り越えていくために、時として、ポジティブな自己そのもので即自的に在ることを糧にして生きていかざるをえないのではないだろうか。

(指導教員 中田基昭 教授)

(謝辞 ホームで筆者の体験した事例について、本稿

で考察することを快く許してくださいました林さんご夫妻に、この場を借りて、心からお礼申し上げます。)

#### 注

- 1) 町沢静夫, 『心の壊れた子どもたち』, 朝日出版社, 2000, p.34
- 2) 同書, p.106以下
- 3) 同書, p.36以下
- 4) J.-P. Sartre, “*L'être et le Néant*”, Gallimard, 1943. なお, 本書からの引用及び参照に限り, 引用文の後の( )内に頁数を記すことにより, その箇所を指示する。